太田道灌雄飛録　二

へ13
3915
2

13
號3915
巻 2

大日本大學出版部
贈

太田道灌雄飛錄卷之二

日錄

一 成氏管領上杉憲忠と不快の事

一 成氏憲忠を殺す 并に上杉入道道朝越後へ奔る事

附り 太田道灌退口武勇の事

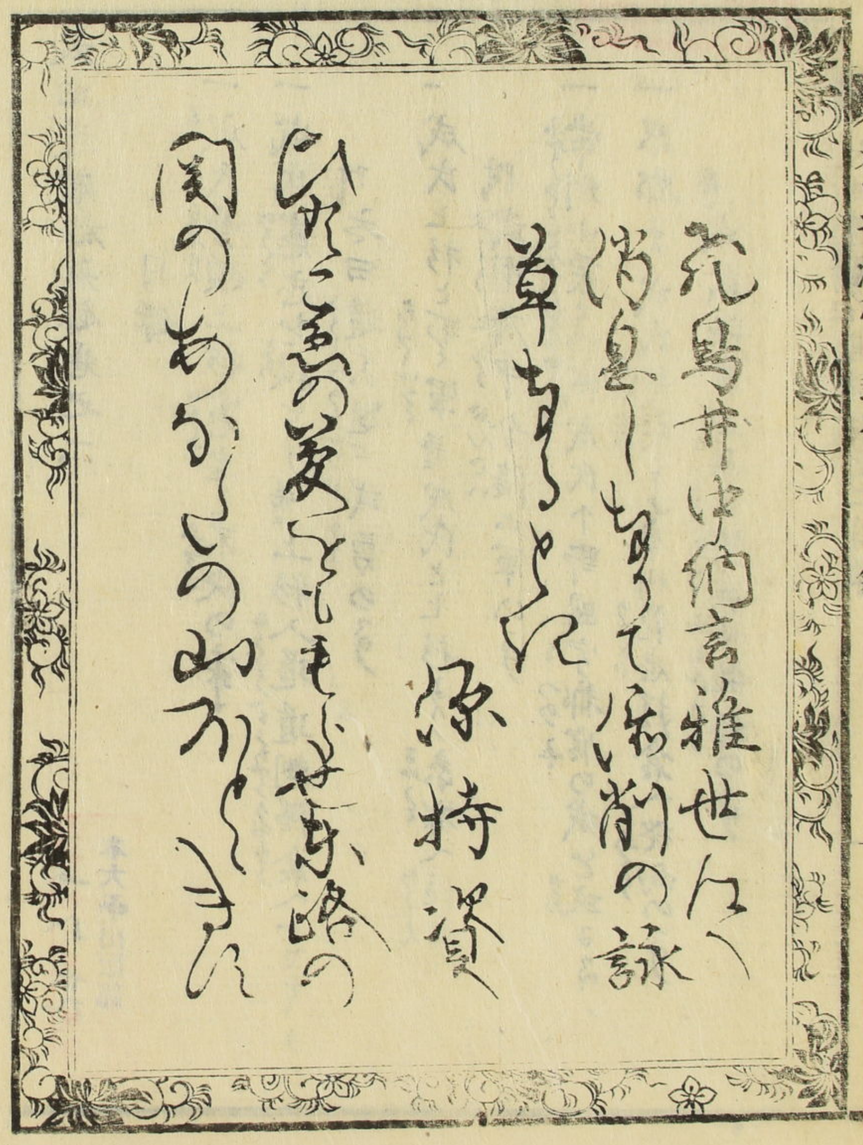
一 成氏上杉と軍 并に成氏と上杉より京都へ注進

附り 武州府中分陣の軍の事

一 常州小栗城成氏へ野國宇都宮の城を攻る事

一 京都より成氏征討として今川範忠越後へ發向の事

并に 成氏逆意を以て軍兵を乱妨の事



太田道灌雄飛録巻之二

東都　木村梅年忠貞編緝

○足利成氏管領上杉憲忠と不快の事。英和平の事

其頃山内ハ上杉右京亮憲忠若年ゆゑ家長長尾左衛門尉能景諸事名代ゝて政事を執行ふ。又扇ヶ谷へ修理大夫持朝卿も持氏滅亡のゝち憲實ゟ一味乃并一ゝ世中をはからひ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

と云。世の人もその頃東国無双の者なりと。其名人多く都にも聞え将軍家にも其のりくおぼしめさるる。中にも毛尾孫兵衛と云人乃統率なるべし。彼人これと崇敬して其威風ぶるる者もまれ。毛尾は三流あり。上野白井と。上総佐貫と。武後と云あり。世に成氏へ當時出頭の人々結党因小山ぶ田宇都宮等中にも千葉新介亂将。又の亂直持氏へ不忠申〻〻〻も。同姓馬加陸奥守康亂を勧めよりて。成氏の味方参る。上杉と云ふ〻〻より妨げ威と振ひ〻〻ふる。太田かすけと事〻〻〻

寄手の綱四百余騎、鬨を作りて、勝ちとりたる太田長尾が馬廻りの方より、鬨の声とどろかして、折くるる。長尾能景これを見て、始めの軍に、若者ども、真先に進んで、火炎よりもはげしく、戦ひ、敵方へ小山を駆軍の恥辱と雲霞と。切れども射れども、物ともせず、敵方へ打て出れば、敵方、尾を備へ、色めきたち、殊に小田宇都宮へ、とりわけ追ひ、千葉小田宇都宮へ、とりわけ追ひ、終に虎口に入る。敵方、勝ちぬるぞ、安堂とぬかるべし。能景を討死もと。長尾景は取挫けば、敵方へ、大きに怒り、蓬き味方の者ども、これ、敵に小勢とりつくして、大将どもに、なれと。頻に、わめき、叫ぶ。大勢の靡きたるを、傍すれば、一返一返、ヒタ、ぶ、恐怖、とりて、二陣より、ひかえたる。太田資清が、部伍へ、崩れたる。

資清は、先陣、利なくして、入谷、ん、と、弓を、の方へ、おし、出、と、みて、先、の、兵、書。さんざ、ふりて、孔、を、かくして、資清、蓮、を、ちらして、怒、ども、如何、ともせず、ひかるる。遠く、味方、ふ、ら、れ、十町、ばかり、退、さる。佛、訪方、乃、三、将、を、勝軍、へ、せ、ども、ども、兵、壓、ども、我、ひ、疲、れ、へ、怒、る、物、もあ、ざれば、退、付、る、はでも、あ、く、孔、を、たりて、ひ、り、来。平、中、言、上、ゆ、ゑ、みりびる。廿日の軍、より、退く。ひかるよ、扶、宣、恵、も、今、度、の、一、戦、へ、自、分、の、ひ、り、へ、ば、ざ、れ、ども。後、雑、も、如、の、と、ひ、ら、を、べ、お、ば、士、沢、山、へ、ぞ、摘、ごり、る。安、中、入、上、扶、安、房、の、道、長、揀、ぶ、平、三、帝、重、方、へ、道、道、焼、へ、先、来、安、房、の、道、と、芸、よ、塚、会、を、立、退、き、彈、傷、とりて、在、る、が、廿、ひ、ら、ひ、の、事、に、関、て、江、の、ゑ、の、佛、陣、へ、来、りて、今、度、の、不、義、へ、全、く、憲、忠、が、逆、ふ、へ、ゆ、ゑ、と、編、よ、家、へ、ぞ、る、が、企、ふ

ゆゑなり。のこぞ伊賀光宗ありて和平を預ひきるよし。頻ふ伝聞。
よてしかるに。成氏ゆも伊勢納得のゆ。殺免の旨仰出されて。諸人
大きよ悦び。鎌倉無事よ頼ま成氏ゆ家人ゆ
復帰のる喜状如同

関東執奏事上扶右京亮憲忠雖居其職。依為微若長
尾景仲門尉自専諸職。今茂如八幡宮。古河備中守為作合張本
渡意遂用合傍輩。新構種々造意。緯及火急。忽有無投手。憑思
去月廿日。彼両人一日為長尾古河出張。軍交勢
寄来腰越浦。彼合戦之間。小山下野守家人教業合討死。其
後彼等出由比浦。如千葉新介小田僕従守宇都宮下為
法方数輩攻戦間。出徒等。彼歩数輩攻戦。糟谷先引退。彼合戦

行。長棟合弟道悦。傷為重。自駿河。彼物語。
彼間以寛宥之儀。今復免首。付如案上。今雖泥結。自去沢山。
構要害之由。其聞。次。長尾方。以下之出徒。去速。
由之成敗。此一件事。不堪時日。雖須延。相待也。
彼合言上。今延引。

一 右京亮事。自元無俱尚。不自由。不便之至。
宥憲忠。彼官人中。長尾名字。数輩。羽生小幡小宮山下。数十人
独案当陣。

一 安房入道。関東。彼行政務之由。可被仰下。

一 去廿一日合戦時。戦功之輩中。成下。底之。教書。

一 関東諸侍。武蔵上野。一揆輩中。憲忠。者。被仰下。教書。

尤可然存

一奉対京都一切不存私曲以前自今以後義を抽て忠勤肝要

安房へ道灌手紙若猶早速可相届彼下上裁決之畏入奏

趣可然様に令披露給へ忠く存ず

六月十二日　成氏

左馬門督へ道灌

かゝて京都より市郎書をもつて下されて。双方和平調ひ一べ。

同じき八月成氏ふも孫会へ内通ありけり。

○成氏上杉憲忠を殺を所り上杉持朝孫会へ書る左面道真

退に武勇の事

さきに将軍家の内命にて。今度成氏へ不義の軍出陣免なり。憲忠

ふも和平なりがたきこゝろ。然西堂。龍王院のあ僧ぢ使として下向の間。

成氏より也一色宮内少輔範直武田右馬助信長をさしよせ合ふ。

憲忠も長尾上杉と出て。小山内へ飯沼へ出仕を。左面資清。

長尾雅楽ふも。市免を蒙り出仕成遂の市左方市馬と獻よてこれ

あへ道して。能景ハ冒賢。真清ハ道真とぞ号する。かゝるべ憲実

入道長棟とも孫会へ内通あるべきこゝろ。然よりも行下さる。成氏も再三

仕使ありけれども。終に第一代して。伊豆国名城の国清寺へ出家

隠居ありけるが。後中ハ芸州乃院と国通して西国の方へ行脚し来ハ

関東国深川の大寧寺へ遷化しけるとぞ。道灌ハ始より秋三郎重

方と云ひ名乗中興より道世して。硯屋和尚孔子堂と云ひ生涯仏門の徒と

ありあるる世よ聞えてる道人がりもるるかしの鴻の合戦のとき。孫氏へ清
敵とありてる一味のものども教人本領を没収せらるべき。和後覚兎乃
後ず領を清返し下さるべき旨紙。憲忠より頻よ許給しきれども。成氏
曾て弟詳あるりるる。見よりる結く分国の一揆彼官へ給べ百姓ども
狂反数新よ和すぶとらへども。孫氏更よ世へ事ふ〜。こうありて結
者とも。李ちあるの庄園すも押えて。家人名ふ恩補さるもあるよ。国〜
より訟止む事なく。騒動怠劇月紙追く奏り。何さまた乳の端とええ
られば。孫氏より憲忠小命ぜらるる。折檻をかくらるとのべども見て知のぞ。
かくすべ〜。東国の大事日ゆ〜ぶ〜〜して先事〜と。おのく安きこころも
あるり。愛ふ憲忠の舅。扇ぐ谷の修理へ乃道鋼へ。俗世の中を考へ
るふ。憲實ぐ持氏ぐ紙亡しくる事の憲〜人ぐよあり。その中ゆ

成氏恨このうでやふあぐき。孫ふ結束ぐ紙姫。れ乳よ憤を懐く時
なれば。憲忠ぐ身の上誠よ〜〜深刻小隆むの患あり。そもかくても
姫路君臣合体の朝ゆぐ〜〜。一家の滅亡紙ふるよ〜〜ん〜ハ女子〜
と。毛尾へ道昌貫と示し合せ。家ゆよ野へ下至一味の族を併ふ〜〜。
種く紙計畧をぞめぐ〜ぢる。世日紙清新方。義仗方とく二ゆよ分ち。
不快ゆくあり〜ゆる。清新方紙くく仕事を国〜〜ひ〜〜〜。右衛門新弛
集ら。上杉長尾ぐ隠深脱し番覚ぢる。少時も油断よみよぐ味方の
一大事ちくべ〜。ぐぐ憲忠を退治〜関東を鎮むべ〜。成氏へ勧めを
もべ清新ゆも兼てより思〜えとゆるれば。尤の義ぞ〜〜〜。芝原荘
あり。在藤金の人ぐ紙名ぢる。一番よ結城中務大輔成朝武田右馬助
信長印東式部少輔ぐ二百騎ぐ〜思び出ふ用意ぞ〜。芸不名紙付

前の領上杉安房守憲実
入道長棟舍弟円三郎重方
入道道悦を伴ひ伊豆に
國清寺に籠て中道へ赴く図

永享十年。享徳三年甲戌十二月廿七日の歳暮の夜。上杉ゞ宿所藤倉岡御門の館へ夜ゝ毒ゞ岡の声を吐くつくる。憲忠へ敵の来るべきことをうたがひ。すゝぶ。俄の事わてのりなの人兵士もうりそれば。得さりやかしとと市郎方乃軍勢等。左右なく死をへるる。右京亮憲忠。舎弟右京亮憲房顕故犬懸入道禅秀ゞ息刑部少輔憲秋。弟等廿二人今へ道をねとこゝゝ。潔ゝく打死せよと切先をそろへて出ざたうつとりくゞも大勢よ死巻を。後年てぐゝく憲忠も先那より厳しく戦ひるゝ。数多を負ひてその夜合戦はぎゝあるゝ。自害せんとする所。彼ゞ射ゝもゝゝね矢一ツ来りて其甲ゆぞ立てうるる。急所の痛ゞまりうれば眼らんでうつぶゝふぞうど伏を。見を見るゝ結城ゞ弟等。金ゝ終理光氏家を貞義二年由人藩合ゝ。憲忠ゞ前代ぞゝゝゝゝゝ。

按ずるに金子氏家八其祖武蔵国村山党人金子十郎平家忠ゞ二男左衛門尉宗政ゞ七代孫ゝ。源頼朝ゞ。武蔵国多磨郡金子の郷ゝ。ゝ。後朗女ゝ。ゝて結城満廣の。家ゝ郷。岩義をもつて賢ゝ家智を儀る。其後光義古ゝ式業ゝ。結城へ。ゝ。其ゝ氏家を始ゝて家門ゝ。ゝれ従ひゝき。結城の家もゝゝ。

抑ゝ憲秋。房顕の両人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。事成計らんと。夜ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

相滅ろう。成氏蒔氏家ゆ三ッの褒美ゆ賜ふ。甲斐実検の三方血よ
流くそ。刎を断る如くうえうまび刎のよゆ一文字を家の紋よまるゆ
二ッゆ同花の金合と称ふる。三ッゆ常陸国真壁郷三千二百石のる。
氏家まこと同じ下妻城と給ひて世所よ給ひ名字を賜ふ。
あくまで。扨又同廿八日由ゆ清所勢憲忠が山内の紋を追捕と称して
上列ゆ進ありうまび。扨朝ゆ道方ゆ怒りて。毛尾ゆ道昌賢方ゆ道道
真。その外一味の軍をおりうり。一千騎人鴻河ゆ寄せ来り。後陣の
勢を清五郎。こゆ成氏の内合勝長寿院の成潤ゆ連校のこと
あまび所方ゆ一人ゆて出雲ゆ。敵ゆ内ゆ騒ぎ一番ゆ出ん。代弾動の
紛ゆ藻金紙者を知て。家ゆ内ゆ内の日光山ゆ入ゆ出ゆ敵と一味の色
とあくゆ。一五の衆徒ゆ備ゆられる。新て成氏ゆ。上杉ゆ再数ゆ

憤ゆ。代成ゆ垂二の金鞍ゆ。上杉の者ども悪くゆ亡し。根紙郡く
墨紙拾ゆんと。武田右馬助信也。一色宮内ゆ補能ゆ紙又将ゆて藻金紙
ゆ。敵陣ゆ外寄ゆる。上杉方ゆ沖所方小勢ゆれで。ゆ。ゆ来
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。油ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ゐも危きこと度々なり。大田入道左眼中より矢おりゐ出す。今は傷あく引くはずして射方の者ども。猿ゐふく付まゐん。某世ゐあく対面し給の命ゐ代らんと。只一人ゐとく返を。太田ゐその日の出立に紺糸威の鎧よ同じ毛乃又枝鍬の冑。大天衝八眼を〜しるを猪貫ゐ着て。其の孫の太郎餘れるよ。重貞ゐく渕先千鳥を掛る鞍置く。嫡子たりの原徳丸鞍ゐりて〜〜まと近寄り。白柄の大長刀ゐ振の蜻蛉〜〜るを。莖結ゐ引そぐゐ。勝よ寄る市所勢の足並を知して近ひ来る。其中へ〜ゐ年地よ弛せ入。前ゐあ〜ゐを後よ流れ。四方八面よあらして薙ぎる。太田ゐ流云これまんと。一まの人数三百余人付して何ゐ甘んと。系一同ゐ乗てく〜。曳く声を揚て切て入る。芸拝先突く〜く。市所勢ゐ同よ二三十人。急ゐ討死を。太田を狙も勇を振ひ刀八毘沙門乃荒

〜る〜〜秘術を尽〜て奮たく。此市所方も色めきたてぞ乱

〜〜る。武田信也。一番よ向ひ味方の兵者敵の近るゐみり〜ゐさる。

追留の場を寄〜ざるゐ。太田ゐ逆よ返さまと。叶乃ゐよ枝毛尾多

再部伍を立〜〜〜やり返さべ。八までの勝軍八徒事とゐりぬべし。

勢を引揚けく。人るの芳を紙体めんゐ〜〜ちゐ名れべ泥虫も恐し

同ゐ〜て揚貝を吹〜る。太田道も敵ひ出るとえ〜〜れべ自ら

沙よ引き下すく。先まゐ〜〜ん〜〜ゐ漂引きよ立〜〜る。よ枝毛尾ハ

蒼ひく勢よ引〜〜〜よ〜ゐまで引〜〜ぞ白井の塚ゐぞ入〜〜る。

道も入道も中勢ゆ〜ゐ〜〜れべ。是〜〜ゐ乃〜〜れて。武州河

誠ハ内海〜〜ふ。

○長尾入道再勢代集む。市所方上杉方武州分配河系ゐて

合戦の事

かくて毛尾入道の世話ゆゑ、佐野方と付る事難るべしとぞいふ。弐後の守儀職上杉房顕を大之大将とし、弐後信濃、武蔵上野その外、東八ヶ國の内より扶ふ者の輩の人々、上杉八郎藤朝、同廳曽和左衛門、同十郎憲明等、上野より下野に天命に背き、扶氏退治に討ためらしし、くるみ。又故犬無入道が息、右馬助憲秋、又道灌の方へ加勢し、成氏と国を、敵の要害に網つぐる事ふうちゝ、自然と自然に寄て扶一揆せ。然と四方を取巻、のこゝ、遠路みゝ、きれば、粮道を絶切、もて。弐後より、其方の一我の励ましもあく、思べくふ落行くもび毛尾も沈堀叶ぬ。成氏上野の一揆ら成

駆りあつ、武州境へ退きて陣をとる。かくすべし。成氏も下総國葛飾郡古河の鴻の巣とりて、屋形を立、国国関宿の城に築田治門を成氏、野田の城に野田右馬助を、岩槻に成氏、武蔵、甲斐、上杉より、結ぶの味方を集め、近日境へ義向し、上杉氏尾上成氏討亡し、東國成平治せんと其評議なるべし。世より又下総の千葉孔胤直入道常瑞へ日比深会の侍所あく。扶氏へ度々の忠節あり。扶兄弟へ故禅秀が外孫なり。今度彼が息憲秋下向し、成氏を扶と合戦し、扶氏の敵ゝ、ゝ、ゝ、

らるゝ。よって扶憲忠事、不義逆乱の間、投ぜ[ず]伐罰を加ふる處なり。京都へ対し奉り毛頭不義となぶべからず。よりて京都の御願ゆるしなく、一所も綸旨なくば、野乃足利の庄へ御菌字の地あるべきの旨、代官紙下さるべきの旨、再三申入れども、京都より御使ゆるされず。関東の擬作厳密乃正沙汰もみよがたし。唯成氏が私乃宿意を以憲忠を討ち、殊によりて東国の大乱と成る。不義の至りなり。御勘気の事ども、西堂も尋ねしく仰向こうるべし。はやく成氏を退治して関東を治むべきこの事、ふりなり。成氏今へせんなきなり。さらば敵うへ者、追伐せらるべし。享徳四年正月五日千余騎の軍兵率して孫倉と出馬あり。武州府中へ参向、鄙敷の小津と云ふ。是を越て扶方有馬助憲秋、大勢にて

二千余騎。同月廿一日、是も同じく府中の分倍河原へ参陣する。成氏へ参ず。百余騎を二陣に殘し、同じく百騎を虎鞭よりて旗のもとへ下し。上杉の先陣へ向もふくもと切て入る。扶方も先日の恥をすゝんと、紙後信濃乃新田の軍兵、敵を小勢と侮り、破んと。使つて寄てゞ切てゝ使ふ。曽村乃同方へ向ふ。御方へ物別と云ふ別兵なれば、敵を追伐て散て。戦ふ所、ふるうもいつんで責うもべ。一戦ハ搦りそゝ是。始の搦手ハ仰せ出ずと一度よりとゝ通敷べ。後より参る孫倉勢。行くまでもと遅かゝる。大将右る助憲秋、味方を制して踏止り。是ひ来る勢とゝて、こゝ。通し合ふ者もなく。右往左往よ通ふる。憲秋も只一騎、残り数ヶ所の傷を負ひぬ。今ハ力疲れ、うれべ。味方の陣へ入る事あるべき。高旗寺へ独へて生害をすゝめる。

（註）旗幸八多摩郡得順の人なり。大宝已来の草創にして坂東三不動の一なり。孫倉常住金剛寺と号す。下総の成田新勝寺なり。相模大山寺。下総の成田新勝寺なり。不動は相模大山寺。

方おも軍を入れ利を為しそ。石堂一色を始めとして宗徒の者百人十人討死せしそ。戦ひ労をなく分倍河原に陣を取る。明るべ廿二日の早天に上杉方より羽続修理亮明利。大石源左衛門憲義。荒川の兵三百余騎。分倍河原へ打ち寄せる。関の声を揚げる。市野方おも昨日の軍に歩渡て。雪を凍然と〳〵なるものもなれば。敵会者なるとも少しも怯ず。暫く鯨波の事式合せて徐々と進み出さんぐるよりて。上杉方みな勇を進ちられ三丁ばかり引退く。市野方は勇み進み。是を奇として上杉の本陣へ責かれと。里見治部少輔。瀬谷修理亮。佐軍戦指揮して追付を。実に大石源左衛門は。味方吹目の紛軍式世おも暫くとい居るべ。今日の一戦万一味方退く時乃為なれば。是迄の中に

精兵の射手と三十人ばかり勝て出し。一むら〳〵義アり〳〵小藪の陰に埋伏さるて居るなり。かくしてい知しべ孫倉勢。敵と敵るに上杉軍を彼の處すでもと追て行。大石憲義は或そ〳〵ひ。或は退き。味方のものと引き出さるる。さるとても市野方おも〳〵ひ来りて。上杉の旗えを目おけ潮の湧くごとく不進く来る。大石が兵衛ども是形勢を見るるうも。時分はいまと一同よかけ出。矢を早おを射出し〳〵う。まつ先よ進んぐる市野方の兵士十四人ばかりくと射倒さる。中ほど瀬谷勇のあれおへ兵ども。源へ出せしで。今へこれまでも。後より新よ迫来へ〳〵と。采配振とく下知されべ。是と大石源左衛門憲義。大石の兵衛ども。あの如くよ敵つ矢よ。瀬谷勇が徒射通すべ。其へ鞍うりあまされて出迫さるる為てそ。

当の敵を討とんとるの奥を

引向けるところ。矢一ツ来りて射向の袖より脇垂へ貫ぬきこそ射
通さるる。急ぎすれバたちまちよろ伏ふりて死しぬる。上杉の二陣
のものども。先を争ふ。なるとても殺すすめて和しを。陣所方乃後
陣より使ひ。結城小山。武田村上等入りて多くの人数の集り勢一変ス
風し狂ふ。二陣も竟よ歩負て敗走ちりふる。扇が谷より扇
房孫ハ後陣より下りて引るが。味方とこゝめて守返さんと頻よ下知
あるとゝ。ども。ゝ。ゝ。ゝ

下総の千葉介胤重入道常福。同常中務の道了。下野の宇都宮下野
守等綱。山川左衛門尉朝重。真壁左衛門尉長幹。小栗十郎が逆
徒を誅。中にも宇都宮綱。宇都宮の城。小栗十郎が逆
徒を誅。時一味同心。城の屋を付きとる。右馬頭持綱がよあり。そのときへ
僅四郎左衛門尉。宇都宮の城に籠て。佐竹の家人多勢をもて。十九騎にて
佐竹兵と戦。手負多。安藤しらじが眼に射出るなり。今度も
最初は敵と成て籠城。氏も他の敵とはしらず自宇都宮よりよせ。
城の四方を囲。一人も餘をすごさず。攻たてゝ。城中兵糧
乏しく防禦の術なし。よりて等綱が羽翼乃臣芳賀伊賀守
紀清両堂の兵を率。宇都宮が惣領弥三郎明綱へ。山村改が
堀まくあり。氏とうの宇都宮の家絶さるべく。氏へ降参

さる。芳賀兄弟等綱を息男明綱。芳賀伊賀守。降参
人。防ぎ。便なく出入道。まの徒よさるを。奥列向川の
方へ。落行たるか。山川左衛門の体も攻ちぬ。いづれも
佐竹方へ降参。

○成氏征伐。今川範忠縁参。向。成氏縁金退。附
軍勢の事

享徳四年乙未。京都将軍義政。成氏征伐の事。参陣あり。
すなわち。當今後花園院。綸旨。佐竹襲。賜る。佐竹襲あり。佐竹宸翰あり。

らくやまふかき中雲のけしきのてあり。あるまのちり紙。秋風
外に龍虎を画きたる。佐竹旗二本あり。将軍家。ろも。佐竹。義書。紙
まるゝ。廉。旗。おとゝ。ろ下る。惣大将。後遠。州のそ。今川。紙。

成氏征伐として入川上総介
範忠鎌倉へ発向軍兵ホ
乱妨の図

太田道灌雄飛録之

能忠まうの東海道の軍勢を引率して縁金ク發向す。是より先成氏ハ
古河より縁金ク帰鉱あり〳〵ぶ。此ゟ〳〵を聞きて今ハ是非なき事とも
ゆりとく。木戸内匠助・大森出羽守・印東次郎左衛門尉・里見民部少輔等
千餘人を〳〵具して離山まで押出す。寄せ来る敵を待ちとく。此所を破ら
ま〳〵ど陣ざかりのうひ〳〵皆〳〵うち負へるべ。成氏ハ新田の勢二百餘
騎をひき〳〵向けらるゝとゝ。故ハ雲霞のごとく事りくれば。とゝぐる紀軍
〳〵ゆ武蔵の府中をひき〳〵てぞ落ぬる。此道ゟ世谷とりゝとゝろ。
南一揆のとゝども蜂起〳〵く。縁金ハ〳〵く待ちけり。紀軍ハ中務大輔・筑
田治部少輔・新田宗氏・上野介・上杉右馬頭・上杉右馬頭
道を開き通り〳〵ゆ。成氏ハ武蔵葛蒲ハ落ぬ。紀軍ハ
兵の手をあらゝえ。まより下総国下河辺の庄古河の城ゆぞ落らるゝ。

して古河の御所とぞ申ける。さるにぞ今川ぶ会津ゟ縁金ハ推陽ぐ者も
あらぐ。ハ遠ゟ乱へ〳〵く御所をちぢめ。谷七郷の面ゟ民屋を乱焼し。
すゝひ神社仏閣ゟも追捕〳〵てゝゝぐ。抑縁金ハ右幕
下頼朝卿草創の地ゆ〳〵くその後北條九代の繁栄も高時の道ゟ亡び〳〵
ゝゝる氏〳〵ゝ今成氏ゟ為ゝく。古代栄枯の対寶此時皆ゟ羅
まて強る事なく。永〳〵亡ぶと申り。ゝ。田圃草野と変ゝ。こゝ
日ゟ享徳四年乙亥六月十六日の事ゝ。ゝ。ゝ。今ハ村老牧童
の古弦をまぐ。人と迎ゝく。懐旧の情を述る種とぞ。ゝ。
張子の会津の守ゝ。ゝ。ゝ。峰のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
躰ゝく神躰を奉ひゝ。張ゝく持ゝく巳ぶ国の忌場とせんとす。
神ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。その後神躰ゝ。ゝ。ゝ。荘柄へ遷座まゝく

てのゝ再のゝ雲往と仰がれ給ふ事。

太田道灌雄飛録巻之二終